

と異常高値であり、頸部 CT にて右副甲状腺腫瘍を認め、副甲状腺腫に伴った原発性副甲状腺機能亢進症と診断した。DIC が改善した後、副甲状腺腫摘出術を施行し、急性肺炎および高カルシウム血症は徐々に改善した。病理診断は腺腫であった。また、腺仮性嚢胞を認めたが、これも徐々に縮小し、現在経過観察中である。

10) 乳腺原発腺様嚢胞癌の1例

坂田 純・吉川 時弘
加藤 英雄・大竹 雅広 (新潟県厚生連長岡)
大森 克利・塚原 明弘 (中央病院外科)

乳腺領域では稀な腫瘍である乳腺原発腺様嚢胞癌の1例を経験したので報告する。

【症例】74歳女性。10年程前より約1cmの右乳房腫瘤を自覚するも放置していた。1999年1月頃より腫瘤の増大を認め、同年3月15日当科を受診した。右乳房AC領域に2×2cmの腫瘤を認め、穿刺吸引細胞診では悪性細胞を証明できなかったが、超音波検査及び触診所見から乳癌を疑い、1999年3月24日組織生検を施行し腺様嚢胞癌と診断された。1999年4月15日非定型的乳房切除術(Auchincloss法)を施行した。術後経過良好で10日目に退院し、現在再発徴候なく外来通院中である。

【結語】乳腺原発腺様嚢胞癌は全乳癌の0.1-0.2%とされ、本邦でも20例程度の報告があるにすぎず、稀な疾患である。

11) 進行、再発乳癌における腹直筋を用いた胸壁再建法

三浦 宏二 (がん検診クリニック
ク三浦外科)
川合 千尋 (消化器科, 外科)
川合クリニック)

進行、再発乳癌切除後の欠損部の被覆法としては、植皮、広背筋皮弁、横軸方向腹直筋皮弁、縦軸方向腹直筋皮弁などがあるが、我々は縦軸方向腹直筋皮弁を用いている。

その理由としては、1) 他の方法に比して被覆範囲は広く血行も良好、2) 広背筋皮弁のような体位交換が不要、3) 胸筋合併切除された胸壁の整容が得られる、4) リンパ浮腫の予防効果があるといわれる、などの利点があるからである。

これまで11例に行い、平均手術時間は2時間22分であった。2例に皮弁辺縁の皮弁壊死を、また2例で腹直筋鞘欠損部の腹壁ヘルニアを認めたが重篤な合併症はなく、乳癌患者のQOLをよりよく保つ点で推奨できる方法と思われた。

12) 成人鼠径ヘルニアに対する mesh plug 法と Bassini 法の比較検討

— アンケート調査を用いて —

竹石 利之・遠藤 和彦
石川 裕之・木村 愛彦 (秋田組合総合病院)
藤田みちよ・小杉 伸一 (外科)

成人鼠径ヘルニアに対して行った mesh plug 法及び Bassini 法の術後経過をアンケート調査を用いて年齢別に比較検討した。

mesh plug 法は、Bassini 法に比べ、術後入院期間が短く、40~69歳の群において、術後疼痛と創部違和感には有意に早期の軽快が得られた。社会復帰に要した期間は、両群間で有意差を認めなかった。

mesh plug 法39例中初期の1例にヘルニア囊の処置不十分による再発を認めたが、術後創感染や mesh の拒絶反応は認めていない。本法は、従来法に比べ成人鼠径ヘルニアの術後愁訴の軽減に有効であると考えられた。

13) 成人鼠径ヘルニアに対する Day Surgery

— クリティカルパスを導入して —

大上 英夫・大谷 哲也
片柳 憲雄・藍澤喜久雄
山本 睦生・斎藤 英樹 (新潟市民病院)
藍沢 修 (外科)

1998年6月から成人鼠径ヘルニアに対し局所麻酔下で mesh plug 法を行い、12月からクリティカルパスを導入して治療の標準化を計った。今回、1999年9月までに mesh plug 法を施行した77例にアンケート調査を行い、本治療を評価した。パス施行例では、入院日数が短いとの回答が53人中23人、43.4%にみられた。理由は、不安および傷の痛みが23人中17人、73.9%をしめた。本治療を満足、やや満足と回答した人が83%に認めた。今後、術中の痛みのコントロール、2日入院に対する不安の軽減が肝要と思われた。